滋賀文化財だより
NO. 125
1988. 3. 30
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

154．昭和62年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その1

本年度も滋賀県下では多くの発掘調査が実施され、多くの貴重な成果を上げています。埋蔵文化財センターでは、毎年、その成果の情報交換の場としてスライドによる発表会が行われていますが、今年度からは、内容の充実を図るため、昭和62年9月26日と昭和63年3月5日の二回に分け、発表件数を減らして、発表・討議のための時間を十分に設けて行われました。

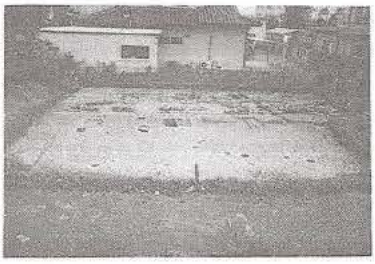
今後の参考として御活用いただくために、ここにその一部を紹介いたします。なお、寄稿くださいました方々においては、何かと御多忙中のところ、御協力いただきましたこと、当紙面を仮りてお礼を申し上げます。

1．「政庁」に先行する建物発見か？

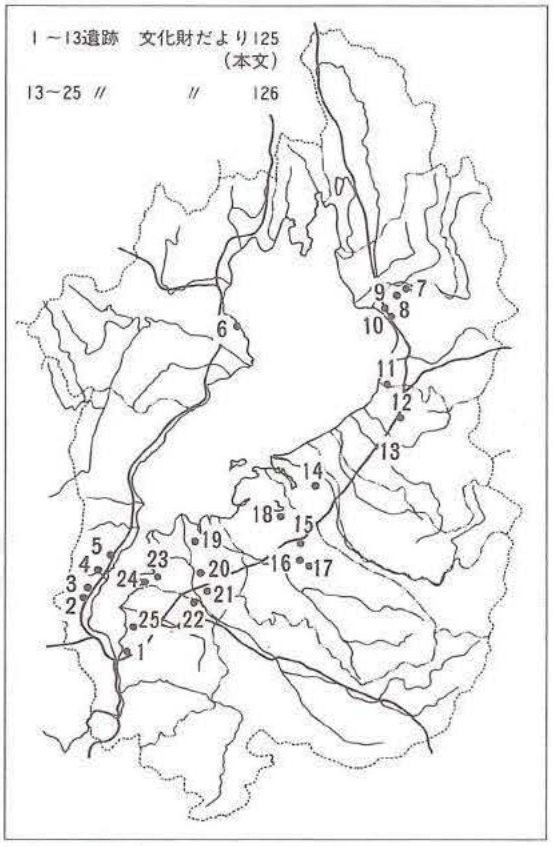
大津市瀬田　近江国庁遺跡

国庫補助金を得て、近江国庁遺跡の発掘調査を毎年実施している。今年度は5ヵ所で調査を実施し、そのうち3ヵ所で国庁関連の遺構を検出した。

特に、第5地点は遺構の残存状況が良好で、近江国庁に関する新知見が得られた。その最大のものは「政庁」遺構に先行する可能性が考えられる柱列の検出である。これは、地山面から南接掘り込まれているものであり、一部の掘り下げのみではあるが埋土内には瓦片等の遺物は含まれない。一辺 1.2m程度の大型方形柱穴であり、その形態からも奈良時代に比定できる。他の遺構が、地山面から掘り込まれる場合には瓦片等の遺物を埋土内に含み、大半は整地層から掘り込まれている事実が存在する。これらから判断すれば、この柱列を「政庁」以前と考えるのも決して無理ではないだろう。



調査地の全景



遺跡位置図　（位置図の番号は本文と同じです）

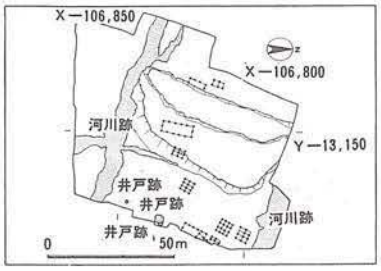
「政庁」遺構の年代については、奈良時代中葉から平安時代前半の間で理解される。いずれにしろ、それ以前の「第1次政庁」の想定が必要である。今回検出した柱列が、即「第1次政庁」に比定されるべきものではないが、この「政庁」変遷史に何らかの問題を提起するものではある。

整理調査が進展していない段階での推論ではあるが、近江国庁遺跡の調査速報として、「政庁」遺構に先行する可能性を考え得る柱列を検出したと記しておく。

（㈶滋賀県文化財保護協会　細川　修平）

2．「南寺」・「南前」・「大薗」等墨書土器多数出土

大津市上高砂　上高砂遺跡



A地区遺構配置図

上高砂遺跡は、崇福寺跡の南東約 1,000m、南滋賀廃寺の北約500mに位置する。今回の発掘調査は西大津バイパス建設に伴うもので、約10,000㎡を対象に実施した。

調査の結果、主要な遺構として、古墳時代の溝跡数条・古墳1基、平安時代の掘立柱建物跡10棟以上・井戸跡3基・河川跡2条・溝跡数条を検出した。掘立柱建物のうち、6棟は総柱の建物である。A地区南半で検出した河川跡は、幅約5～9m、深さ1.5～2m、全長70m以上を測る。この河川跡は、これより南には遺構が認められないことから、当遺構群の南端を限るものと考えられる。

遺物としては、弥生時代から鎌倉時代にかけての土器類・石製品・木製品が多量に出土した。特に河川跡からは、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器等が多量に出土し、なかに「南寺」・「南前」・「大薗」・「一井」・「一井」・「勢」等の墨書土器が約30点認められた。また、円面硯や祭祀に関係すると考えられる人形・船形木製品・馬の歯も出土した。

今回の調査結果から、平安時代の上高砂遺跡は、一般的な集落ではなく、「南寺」と呼ばれていた寺院に関係する施設と考えられる。この「南寺」が何処に所在していたかは、現在のところ明らかでない。しかし、上高砂遺跡の北西約 200mのところに、「南」銘平瓦を焼成していた平安時代前期の長尾瓦窯が所在し、「南」銘平瓦と同時に焼成された軒平瓦が崇福寺跡の南尾根で出土しているという事実は、「南寺」の位置を考えるうえで重要なポイントになるであろう。

（大津市教育委員会　青山　均）

3．T字形の平面形を有する横穴式石室等検出

大津市滋賀里　太鼓塚古墳群

大津市教育委員会では、西大津バイパス建設に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を進めている。ここでは、滋賀里にある太鼓塚古墳群の今年度の調査成果をお伝えする。今年度は、約 4,000㎡を対象として調査をおこなった。

調査の結果、縄文時代から江戸時代にかけての遺物と、古墳時代後期（6世紀後半から7世紀前半）の横穴式石室等を主体とする古墳14基を検出した。

古墳は、全て天井石が失われているが、遺りのよいものでは、現高で3mを測るものもある。14基の古墳は、小さな谷により、大きく3つのグループに分れる。北からA・B・Cとする。Aグループでは、今回の調査では1基しか確認できなかったが、羨道に対して玄室が横長に取りつくもので、平面形がT字形をなすものである。玄室の規模は、長さ3.2m、幅4.2m、高さ3m、羨道は、長さ7m、幅1.6m、高さ 2.5mを測り当古墳群では最大級のものである。石室内は盗掘を受けていたため、遺物はあまり遺っていなかったが、瑪瑙製の勾玉等が出土している。また玄室内は全面敷石が施されている。Bグループには8基の古墳が見つかっている。これらは、遺物の詳細な検討が必要であるが、さらに4つのグループに分かれる可能性がある。またこのグループ内には、個人墓である小石室等も含まれている。Cグループでは、墳丘のまわりに、小石室や土器棺、土壙墓等を有するものや、一つの墳丘の中にほぼ同一規模の石室が2基つくられているもの等がある。遺物としては、小石室を除くほとんどの古墳から炊飯具の小形模型セットが出土している。今回の調査は当古墳群の一郭を明らかにしただけであるが、古墳群の構造を解明するにあたり、貴重な成果を得た。

古墳群Cグループ

（大津市教育委員会　田中　久雄）

4．渡来人の墓地調査Ⅱ

大津市坂本　野添古墳群

野添古墳群は、大津市坂本一丁目に所在する古墳時代後期の群集墳である。

この野添古墳群は、琵琶湖の西南部に沿って連なる古墳群の中では、最も大きなものとみられる。

列石と葺石をもつ古墳

調査は、墓地拡張整備工事に伴い実施されたもので、対象面積は 6,400㎡、期間は、昭和61年11月から昭和62年11月までを要した。

調査により、対象地内に28基の古墳を確認し、うち17基を発掘調査した。

確認した28基の古墳は、地形、分布状況、石室構造などから概ね3グループに分けられた。

調査を実施した古墳は、すべてが円墳とみられ、1基の竪穴系小石室を除き、その内部主体に横穴式石室を採用していた。

横穴式石室は、平面プランから玄室が正方形を呈するもの（A）、縦長で両袖式のもの（B）、縦長で片袖式のもの（C）の3タイプに分けられた。

玄室については、平面プランが長さ 3.2m、幅 2.0m程度を1つの基準にして設定してあると考えられた。

今回調査を実施した古墳の中には、墳丘が完全に近い形で残っていたものもあり、墳頂近くに列石を巡らし、墳丘下半には、葺石が葺いてあった。

石室あるいは、墳丘の残りの良さに反し、副葬品、その他の遺物の出土は少なく、埋葬時の状況を留めていたのは、2基しかなかった。

今回調査を実施した古墳からは、最も古いもので、6世紀の中頃、新しいもので7世紀の初め頃の遺物が出土していることから、この時期に古墳本来の機能を果していたものと考えられる。

（大津市教育委員会　須崎　雪博）

5．比叡山延暦寺里坊造営時に破壊された古墳検出

大津市坂本　真葛原古墳

横穴式石室全景

真葛原（まくずはら）古墳は、滋賀県大津市坂本四丁目字真葛原1778番地に所在する。当古墳は、京阪電鉄石坂線坂本駅の西方約 450mに位置し、比叡山麓に源を発し、琵琶湖に向かって東流する藤ノ木川の中流域付近に形成された扇状地の南東斜面にあり、標高約139.50m附近にあたる。

今回の調査は、延暦寺学園比叡山中学校校舎の老朽化による改築工事に伴い事前に試掘調査を実施した結果、古墳の横穴式石室の石組みの一部が発見されたので、昭和62年6月26日から7月18日まで本格的に実施したものである。調査の結果、横穴式石室の天井石と側壁の一部が除去されていたが、全体的には遺存状況の良好な古墳が確認された。この古墳は、調査地の北東隅で検出され、小字「真葛原」に属することから真葛原古墳と命名した。内部主体は、主軸がN－25°30′－Wの左片袖式の横穴式石室で、東南方に開口していることが判明した。石室の規模は、全長7.16m、玄室の長さ3.04m、幅2.10m、羨道の長さ4.12m、幅 1.2～1.47mを測る。玄室の使用石材の大きさは、東側壁と比較して奥壁、西側壁が大型のものである。袖石は一石が使用され、現存高 1.1mを測る。石室の床面は、石敷などの施設は使用されず、地山を整地して利用されたと思われる。玄室床面と羨道床面との高低差は羨道部が玄室部よりも 0.7m高く、羨道部から玄室に向かって傾斜して下がり、玄室床面は平坦である。石室使用の石材は、すべて花崗岩である。遺物は玄室内にて須恵器の甕の細片が1点出土したのみである。築造年代は、古墳時代後期6世紀後半頃と推定される。

門前町坂本には、日吉大社境内の造成あるいは里坊寺院の建立に伴って破壊された古墳が多数あると思われ、近年の分布調査と発掘調査により約70基が確認されている。　（大津市教育委員会　吉水　真彦）

6．弥生時代中期の埋没林と地震跡発見

新旭町針江　針江浜遺跡

針江浜遺跡は、高島郡新旭町針江地先の湖岸および湖中に立地する遺跡で、昭和59年度に当該地の北、約750mの所で実施した調査では弥生時代後期の木製品が多量に出土している。また針江大川舟溜航路浚渫工事に先立ち昭和61年度に実施した潜水試掘調査では、弥生時代前期の土器を多量に出土する部分と、埋没林の一部と考えられる樹木の存在する部分のあることが判明した。

今年度の調査は、第一次調査として埋没林の部分を中心として実施したが、人為的な遺構は検出されなかった。しかし、遺跡の環境とその変化を考える上で貴重な資料を得ることができた。

埋没林　約20株の樹木が上下二層にわたり検出された。上層はT・P82.50m付近（水面は84.371m）に存在するもので6株からなる。下層は 82.00m付近に存在し約14株からなり、最大のものは径約80cm、長さ約3m程ある。大地に根をおろした状態で樹木が検出されたということはすなわち、かってこの地が陸化していたという動かし難い証拠であり、二層にわたる埋没林の存在は陸化した状態が長期にわたり続いたことを示している。

弥生時代の埋没林

地震痕　下

層埋没林の生育面から地震に伴う亀裂と噴砂と呼ばれる液状化した砂が地表に噴き上る現象の痕跡が検出された。噴砂は通常震度6以上の大地震により起きる現象である。今回検出された噴砂の規模は幅1.5m～3.0m、長さ約30mにおよぶ。また亀裂は南北方向を中心に40mにわたり大小約30本が検出された。

湖底遺跡生成には種々の要因が考えられるが、今回検出されたような地震も大きな要因の一つとして数えることができる。その地震および下層埋没林の年代は出土遺物から弥生時代前期から中期前葉と考えられる。

（㈶滋賀県文化財保護協会　大沼　芳幸）

7．弥生後期～古墳後期の集落跡を検出

長浜市東上坂　柿田遺跡

竪穴住居跡群

本調査は県道中山・東上坂線の道路改良工事に伴う発掘調査で、今回は調査対象面積6,000㎡のうち、3,000㎡を実施した。付近には、県指定の4世紀後半代の前方後円墳である茶臼山古墳がある他、織田信長と浅井長政の激戦地である姉川古戦場跡がある。

調査の結果、弥生時代末期から古墳時代後期にかけての竪穴式住居、掘立柱建物を中心とする集落跡を検出した。竪穴式住居は、一辺3mの隅丸方形のものから、4.5m四方、6m四方の方形住居で、弥生時代末期から古墳時代初頭（4世紀末）の中央に炉をもつものが8棟、6世紀前半から7世紀後半の造りつけのカマドをもつものが13棟、時期不明のものが9棟である。掘立柱建物は総数29棟を確認し、竪穴式住居と併存していたとみられる。住居跡は、同一面で重複し切合っており、継続して集落が存続していたことがわかった。

これまで、長浜市内での竪穴式住居の検出例は極めて少なく、茶臼山古墳を始め越前塚古墳等に伴う集落の検出が課題であった。特に柿田遺跡での弥生時代末期から古墳時代初頭の住居跡がこれら古墳群と同一時期にあたり、今後墓域と集落の関係を調査する必要がある。当地は現在も関ヶ原から東海地方に抜ける間道として交通量も多く重要な拠点である。信長が上洛の際、近江攻めの拠点に長浜城を築き秀吉を配したことでも充分理解できる。63年度には3,000㎡の調査があり、住居跡が倍増すると思われる。湖北の集落形態を知る意味で貴重な遺跡といえる。

（㈶滋賀県文化財保護協会　仲川　靖）

8．弥生時代後期を中心とする方形周溝墓等検出

長浜市加納　越前塚遺跡

遺構検出状況（西から）

今回の調査は、団体営圃場整備事業(加山地区)に伴う事前調査である。調査期間は昭和62年6月から9月までである。調査対象面積は4.5haでその内調査したのは4,100㎡である。

調査は、第1号幹線排水路、第1・2・3号支線排水路、第1号支線道路、第2号支線予定地に幅2mから7mのトレンチを設定し重機による掘削を遺構面まで行ない、それ以後人力によって遺構精査・遺物採取・記録図面の作成および写真撮影などの作業を行った。地区設定は、調査区全体に40mメッシュで方眼を組み大区割で1から72とし、小区割は1から100まで分け、その基準に基づき各トレンチの遺構・遺物の検出・取り上げを行った。

調査概要は、1区における浅い溝状遺構と土坑状遺構の検出、平安期の土師皿と灰釉陶器皿の出土、5・6・7区における方形周溝墓8基、壺棺墓1基、竪穴式住居2棟、掘立柱建物5棟以上、土坑状遺構10基以上、溝状遺構、井戸状遺構などの検出である。方形周溝墓は全区域で11基検出している。ほとんどが調査区域外に延びるため全容は明らかでない。

壺棺墓は直径1m、深さ0.4mのほぼ円形の土壙に胴部径0.4m、現存の高さ0.4mの壺を収めたものである。壺は底を下にし、口縁部を欠損していた。胴部に大きな孔が開けられ、底部にも約3cmの穿孔がなされている。胴部の孔部に壺の一部を転用したと思われる蓋がされている。副葬品は出土していない。

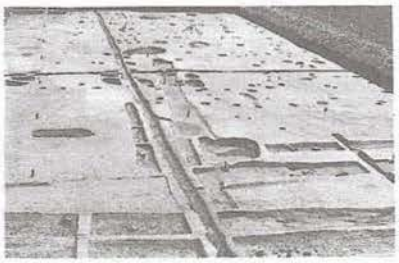
今回の調査において検出した遺構の年代は、弥生後期を中心として、中期から庄内期と平安時代中期から後期が見られ、遺物は弥生中期から布留期を中心として平安後期と近世初頭のものが見られる。

（長浜市教育委員会　森口　訓男）

9．12世紀前半頃の集落跡

長浜市宮司　宮司遺跡

宮司遺跡は、長浜市のほぼ中心に位置する。当遺跡から南東約1kmに位置する大東遺跡が推定第1次坂田郡衙跡とされ、これに次ぐ第2次坂田郡衙所在地とし



遺構検出状況（西から）

て宮司遺跡が想定されている。昭和51年度に実施された第１次調査で郡衙跡としての遺構は検出されなかったが、ほぼ時代が一致する掘立柱建物跡、井戸などを検出している。

今回の調査は宅地造成に伴う事前調査で昭和51年・59年度に次ぐ3次調査にあたる。宮司遺跡の南端に位置し宮川左岸の微高地上に立地した約2,200㎡を調査した。

調査の結果、255のピット、16基の土坑、９条の溝状遺構を検出し４棟の掘立柱建物跡を想定した。遺物は８割ぐらいが土師皿で他に灰釉陶器、須恵器、黒色土器、磁器、瓦器が出土し、木製品では曲げ物、杭、柱などが出土した。遺物はほぼ12世紀前半にあたるものと考えられる。以上の遺構、遺物は調査地区の中心に存在する４条の溝状遺構に区画され、東側へ広がっている。４条の溝状遺構以西は沼沢地状を呈しており、弥生後期の土器が出土している。土器は数片であるが手焙り型土器が一点出土している。

坂田郡衙と直接結びつく成果をあげることはできなかったが、宮司遺跡の南端に12世紀前半ごろの集落的な様相を呈する遺跡の存在が明確になった。現段階では今回検出した遺構の性格を断言することはできないが、今後周辺の調査が実施されていくなかで解明されていくものと考える。

（長浜市教育委員会　音田　直記）

10. 弥生時代中期後半の木製品、土器類出土

長浜市大辰己　大辰己遺跡

遺構出土状況（北から）

今回の調査は、大辰己町自治会による地蔵堂の移転に伴う事前調査である。調査は昭和62年４月に実施し、調査対象面積は 200㎡で調査面積は16㎡である。

調査は調査対象予定地の南側に４ｍ×４ｍのグリットを１ヶ所設定した。掘り下げは人力によって行い、遺構検出・精査・遺物採取・記録図面の作成および写真撮影などの作業を行った。

調査概要は次の通りである。調査地の表土の標高は94.5ｍを測る。表土下30cmまでが耕土で、その下層に暗灰褐色土の遺物包含層があり、その下層の青灰褐色砂層が遺構ベースをなす。遺構は南北に延びる幅１ｍ・深さ40cmの溝状のもので、遺物は高杯・弓・柱材・板材・棒状品などの木製品多数に、これに伴って弥生中期後半の壺・甕などの破片が出土している。

（長浜市教育委員会　森口　訓男）

11. 造出しのある前方後方形周溝墓を検出

近江町高溝　法勝寺遺跡

前方後方形周溝墓

法勝寺遺跡は、縄文時代早期から鎌倉時代の複合遺跡であるが、県営ほ場整備事業に先立ち、今年度は字高畑地区のうち約10,000㎡の調査を実施した。

字高畑地区では、弥生時代から平安時代の土器類と共に方形周溝墓・古墳・掘立柱建物・井戸や縄文時代の石棒、古墳時代の玉砥石が国道８号線バイパス工事に伴う調査や分布調査で発見されており、かなり遺構密度の高い地区として周知されていた。

今回出土した最も古い遺物は、縄文時代後期および晩期の縄文式土器細片であるが、遺構としては弥生時代中期中葉（畿内第Ⅲ様式併行期）から布留式併行期にかけて営まれた方形周溝墓約60基である。これらの方形周溝墓は調査地の全域に及んでおり、東西約250ｍ、南北約 150ｍを越える約40,000㎡の墓域を推測することができ、規模と形態や供献遺物の型式学的編年による時期差から、墓制の変遷が顕著であり、群を構成しており当集落における共同体の様子が解りつつある。

また、重複するかのように掘立柱建物の存在を思わせる多数のピットや、近江町では初例である５棟の弥生時代後期（円形と隅丸方形）の竪穴式住居が明らかとなり、居住地の検討が今後の課題として残される。

そして、L字状に開削された区画溝や井戸・土坑は、当地区の土地利用のありさま（古代からの絹生産に伴う養蚕の桑畑ではなかったか）、集落の水利用（水の便に適していた）の方法が明らかとなったのではないか。

調査区の中央やや北よりに検出した前方後方形周溝墓は、全長約23.2ｍを測り、前方部が撥型に開く特異なタイプで、縦長の後方部に台形の造り出し（陸橋部

とも考えられる）が付く当地域を代表する周溝墓である。前方部周溝から出土した壺形土器は、近江式の有口状口縁を有し最古の土師器の型式に入るもので、弥生時代から古墳時代に渡る重要資料である。

（近江町教育委員会　中川　通士）

12．弥生時代前期の土器出土

米原町上多良　立花遺跡

溝内の弥生土器出土状況

立花遺跡は上多良に所在する遺跡で、古くより土器片の散布が認められていた。昭和62年度県営ほ場整備事業に伴い、事前に発掘調査を実施した。

調査の結果、立花遺跡は弥生時代前期から中期に至る遺跡であることが判明した。前期の土器は包含層からの出土ではあるが、中段階に相当すると考えられ、近江への弥生文化の伝播を解明するとともに、立花遺跡の周辺で、県下で最も古い段階に水稲耕作がおこなわれていたことが判明した。

前期に引き続き、中期の遺物も多量に出土している。特に中期には住居跡と考えられる竪穴や、貯蔵穴と考えられる土坑、ピット、溝などの遺構が検出されている。土器も豊富で、東海地方の影響を受けたものをはじめ、流水文、波状文、列点文、凹線文などの文様を施したもの、丹塗り土器やヘラ記号を持つ土器などが出土している。

また中期では玉造りの遺物の出土が注目される。細形管玉は原材料に碧玉を用いているが、その原産地は佐渡島と考えられる。管玉は製品だけではなく、未成品も含まれており、立花遺跡の中で玉造りがおこなわれていたことを示している。事実管玉を造るのに用いた紅簾片岩製の石鋸をはじめ、砥石、楔形石器、扁平片刃石斧、石錐などの工具類も出土している。

石製品に関しては、玉類以外にも数多く出土しているが、サヌカイトは二上山（大阪）、下呂（岐阜）、金山（香川）の原石を用いていることが判明した。

これまで町内の弥生時代遺跡の調査例がなかっただけに今回の立花遺跡調査の意義は大きい。

（米原町教育委員会　中井　均）

13．室町末期の城下町を発掘

彦根市日夏　妙楽寺遺跡

妙楽寺遺跡は、彦根市日夏町古屋敷に所在する。

遺跡は、荒神山の東麓から日夏集落の西にかけて広がっている。調査は、昭和55年度は宇曽川の右岸、59年度は左岸、60年度は右岸の調査がおこなわれている。62年度調査区は、60年度調査区に隣接しており、両方で室町末期の遺構面が検出され、その下層には弥生時代までの遺構が存在する。また近接する古屋敷遺跡は、彦根市教育委員会が昭和60年度に調査をおこない室町末期の遺構面が検出されている。

62年度調査区の第１遺構面（最上層）の総面積は約8,400㎡であり、工事の進捗にあわせて、７調査区に分けて調査をおこなった。各調査区では２面から４面の遺構面が確認されている。時代は室町・鎌倉・平安・古墳・弥生（中・後期）時代などで、総調査面積は約15,000㎡になる。

室町末期の遺構（第１遺構面）について要約してみると、水路は素掘りのものと石で護岸したものがある。幅は２ｍ～５ｍで、岸にはせんたく場か舟着場であったと思われる「入江状遺構」があり、水際に降りる石積階段を持つ。「石升状遺構」は長さ１ｍ～ 2.5ｍ、幅 0.8ｍ～ 2.5ｍ、深さ 0.5ｍ～ 0.2ｍで方形、長方形のものがある。枠（わく）石は２方、３方、４方を積石しており、底に砂を敷いている例もある。

井戸は素掘のものと井側をもつものがあり、井側をもつ例は、木枠の外側に細長い縦板を置く構造で下部に桶を置く。建物には掘立柱建物と礎石建物がある。道路は砂利混りの土で舗装されている。第５区では交差点が検出された。交差部分の路肩には側石がおかれくずれるのをふせいでいる。橋台は両岸から、大きな石を「せりもち状」に積んでおり橋板(石)は失われている。

鎌倉時代の遺構は、土坑、溝、掘立柱建物、礎石建物、井戸などがある。

平安時代の遺構は幅 0.2ｍ～ 0.3ｍ、深さ 0.5ｍ～ 0.6ｍの深い溝で画された区割りがあり、掘立柱建物跡が検出された。

弥生時代の遺構は住居跡(円形プラン、隅丸方形プラン、五角形プラン)、土坑、溝などがある。

第５区第１遺構面(室町末期)

出土遺物は、中近世陶磁器（茶陶を含む）、土師器、黒色土器、緑釉陶器、須恵器、弥生土器などである。

（㈶滋賀県文化財保護協会　稲垣　正宏）